

新潮文庫

仮面の告白

三島由紀夫著



新潮社

仮面の告白

定価 100 円

新潮文庫

昭和二十五年六月二十五日 発行
昭和四十二年七月十三日 三十八刷改版
昭和四十三年九月二十日 四十刷

著 者 三島 由紀夫

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

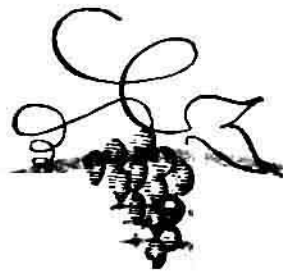
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 東京二六〇局一二二（大代）
振替 東京 八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

新潮文庫

仮面の告白

三島由紀夫 著



新潮社 版

仮面の告白

美——美という奴は恐ろしい怕^{おそ}かないもんだよ！　つまり、杓子^{しやくし}定規に決めることが出来ないから、それで恐ろしいのだ。なぜって、神様は人間に謎^{まじ}ばかりかけていらっしやるもんなあ。美の中では両方の岸が一つに出会って、すべての矛盾が一緒に住んでいるのだ。俺は無教育だけれど、この事はういぶん考えぬいたものだ。実に神秘は無限だなあ！　この地球の上では、ういぶん沢山の謎が人間を苦しめているよ。この謎が解けたら、それは濡れずに水の中から出て来るようなものだ。ああ美か！　その上俺がどうしても我慢できないのは、美しい心と優^{やさ}れた理性を持った立派な人間までが、往々^{まじ}聖母の理想を懐いて踏み出したが、結局悪行^{アクドム}の理想をもって終るといふ事なんだ。いや、まだまだ恐ろしい事がある。つまり悪行^{アクドム}の理想を心に懐いている人間が、同時に聖母^{マドンナ}の理想をも否定しないで、まるで純潔な青年時代のように、真底から美しい理想の憧憬を心に燃やしているのだ。いや実に人間の心は広い、あまり広過ぎるくらいだ。俺は出来る事なら少し縮めてみたいよ。ええ畜生、何が何だか分りゃしない、本当に！　理性の目で汚辱と見えるものが、感情の目には立派な美と見えるんだからなあ。一体悪行^{アクドム}の中に美があるのかしらん？……

……しかし、人間て奴は自分の痛いことばかり話したがるものだよ。

——ドストエーフスキイ「カラマーゾフの兄弟」

第三篇の第三、熱烈なる心の懺悔——詩

第一章

永いあいだ、私は自分が生れたときの光景を見たことがあると言ひ張っていた。それを言ひ出すたびに大人たちは笑ひ、しまひには自分がからかわれているのかと思つて、この蒼ざめた子供らしくない子供の顔を、かるい憎しみの色さした目つきで眺めた。それがたまたま馴染みの浅い客の前で言ひ出されたりすると、白痴と思われかねないことを心配した祖母は陰のある声でさえ面ぎつて、むこうへ行つて遊んでおいでと言つた。

仮
笑う大人は、たいてい何か科学的な説明で説き伏せようとしたのが常だった。そのとき赤ん坊はまだ目が明いていないのだとか、たとい万一明いていたにしても記憶に残るようなはつきりした觀念が得られた筈はないのだとか、子供の心に呑み込めるように碎いて説明してやろうと思込むときの多少芝居がかつた熱心さで喋りだすのが定石だった。ねえそうだろう、とまだ疑ぐり深そうにしている私のちいさな肩をゆすぶっているうちに、彼らは私の企らみに危うく掛るところだったと氣がつくらしかった。子供だと思つていけると油断ができない。こいつ俺を羅わなにかけて「あのこと」をきき出そうとしているにちがいない、それなら何だつてもつと子供らしく無邪氣

に訊けないものだろう、「僕どこから生れたの？ 僕どうして生れたの？」と。——彼らは、あらためて、黙ったまま、何のせいかしらずひどく心を傷つけられたしるしの薄ら笑いをじっとりとうかべたまま、私を見やるのが落ちだった。

しかし、それは思いすごしというものである。私は「あのこと」などについて何を訊きたいわけでもなかった。それでなくても大人の心を傷つけることが怖くてならなかった私に、霜をかけたりする策略のうかんでくる筈がなかった。

白告の面仮
どう説き聞かされても、また、どう笑い去られても、私には自分の生れた光景を見たという体験が信じられるばかりだった。おそらくはその場に居合わせた人が私に話してきかせた記憶からか、私の勝手な空想からか、どちらかだった。が、私には一箇所だけありありと自分の目で見たとしか思われないところがあった。産湯うぶゆを使わされた盥たらひのふちのところである。下したての爽やかな木肌の盥で、内がわから見ていると、ふちのところにほんのりと光りがさしていた。そこるところだけ木肌がまばゆく、黄金きんでできているようにみえた。ゆらゆらとそこまで水の舌先が舐めるかとみえて届かなかった。しかしそのふちの下のところの水は、反射のためか、それともそこへも光りがさし入っていたのか、なごやかに照り映えて、小さな光る波同士がたえず鉢合せをしているようにみえた。

——この記憶にとって、いちばん有力だと思われた反駁はんぱくは、私の生れたのが昼間ではないということだった。午後九時に私は生れたのであった。射してくる日光の影が、筈はなかった。では

電燈の光りだったのか、そうからかわれても、私はいかに夜中だろうとその盥の一箇所にだけは日光が射していなかったでもあるまいと考える背理のうちへ、さした儀もなく歩み入ることができた。そして盥のゆらめく光りの縁は、何度となく、たしかに私の見た私自身の産湯の時のものとして、記憶のなかに揺曳した。

震災の翌々年に私は生れた。

その十年まえ、祖父が植民地の長官時代に起った疑獄事件で、部下の罪を引受けて職を退いてから（私は美辞麗句を弄しているのではない。祖父がもっていたような、人間に対する愚かな信賴の完璧さは、私の半生でも他に比べられるものを見なかった。）私の家は殆ど鼻歌まじりと言いたいほどの気楽な速度で、傾斜の上を迂りだした。莫大な借財、差押、家屋敷の売却、それから窮迫が加わるにつれ暗い衝動のようにますますもえさかる病的な虚栄。——こうして私が生れたのは、土地柄のあまりよくない町の一角にある古い借家だった。こけおどかしの鉄の門や前庭や場末の礼拝堂ほどにひろい洋間などのある・坂の上から見ると二階建であり坂の下から見ると三階建の・燻んだ暗い感じのする・何か錯雑した容子の威丈高な家だった。暗い部屋がたくさんあり、女中が六人いた。祖父、祖母、父、母、と都合十人がこの古い簞笥のようにきしむ家に起き伏ししていた。

祖父の事業慾と祖母の病氣と浪費癖とが一家の悩みの種だった。いかがわしい取巻き連のもつてくる絵図面に誘われて、祖父は黄金夢を夢みながら遠い地方をしばしば旅した。古い家柄の出

の祖母は、祖父を憎み蔑^{さげす}んでいた。彼女は狷介^{けんかい}不屈な、或る狂おしい詩的な魂だった。痼疾^{こしつ}の脳神経痛が、遠まわしに、着実に、彼女の神経を蝕^{むしば}んでいた。同時に無益な明晰さをそれが彼女の理智に増した。死にいたるまでつづいたこの狂燥^{きやうそう}の発作が、祖父の壮年時代の罪の形見であることを誰が知っていたか？

父はこの家で、かよい美しい花嫁、私の母を迎えた。

大正十四年の一月十四日の朝、陣痛が母を襲った。夜九時に六五〇匁の小さい赤ん坊が生れた。フランネルの襦袢^{じゆばん}・クリームいろの羽二重の下着・お召の緋^への着物を着せられたお七夜の晩、祖父が一家の前で、奉書の紙に私の名を書き、三方の上にのせ、床の間に置いた。

髪がいつまでたっても金色だった。オリブ油をしじゅうつけているうちに黒くなった。父母は二階に住んでいた。二階で赤ん坊を育てるのは危険だという口実の下に、生れて四十九日目に祖母は母の手から私を奪いとった。しじゅう閉^たて切った・病氣と老いの匂いにむせかえる祖母の病室で、その病床に床を並べて私は育てられた。

生れて一年たつたため、私は階段の三段口から落ちて額に傷を負った。祖母は芝居へ行っており、父の従兄妹たちが母もともに息抜きにさわいでいた。母がふと二階へ物をとりに行った。その母を追って行って、おひきずりの着物の裾がひっかかって、落ちたのである。

歌舞伎座へ呼出しがかけられた。祖母はかえって来て玄關に立ったまま、右手の杖に体を支^かて、出迎えた父をじっと見つめたまま妙に落着いた一字一字を彫^そりつけるような口調で言った。

「もう死んだのかっ？」

「いいや」

祖母は巫子みこのような確信のある足取りで家へ上って来た。……

——五歳の元日の朝、赤いコーヒー様のものを私は吐いた。主治医が来て「受けあえぬ」と言った。カンフルや葡萄糖が針差のように打たれた。手首も上膊じょうはくも脈が触れなくなって二時間がすぎた。人々は私の死体を見た。

白告の兄の博士が、「助かるぞ」と言った。心臓の働らきかけた証拠だというのである。ややあって又小水が出た。徐々に、おぼろげな生命の明るみが私の頬によみがえった。

仮面の病氣——自家中毒——は私の痼疾こじつになった。月に一回、あるいは軽いあるいは重いそれが私を訪れた。何度となく危機が見舞った。私に向って近づいてくる病氣の蹙音あしおとで、それが死と近しい病氣であるか、それとも死と疎遠な病氣であるかを、私の意識は聴きわけるようになった。

最初の記憶、ふしぎな確たる影像で私を思い悩ます記憶が、そのあたりではじまった。

9 手をひいてくれていたのは、母か看護婦か女中かそれとも叔母か、それはわからない。季節も分明でない。午後の日ざしがどんよりとその坂をめぐる家々に射していた。私はそのだれか知ら

ぬ女の人に手を引かれ、坂を家の方へのぼって来た。むこうから下りて来る者があるので、女は私の手を強く引いて道をよけ、立止った。

この影像は何度となく復習され強められ集中され、そのたびごとに新たな意味を附されたものであることはまちがいが無い。何故なら、漠とした周囲の情景のなかで、その「坂を下りて来るもの」の姿だけが不当な精密さを帯びているからだ。それもその筈、これこそ私の半生を悩まし脅かしつづけたものの、最初の記念の影像であつたからだ。

告白
面
仮
坂を下りて来たのは一人の若者だつた。肥桶こえけを前後に荷にない、汚れた手拭で鉢巻をし、血色のよい美しい頬と輝やく目をもち、足で重みを踏みわけながら坂を下りて来た。それは汚穢屋おわや——糞尿ふん汲取人——であつた。彼は地下足袋を穿はき、紺の股引を穿はいていた。五歳の私は異常な注視でこの姿を見た。まだその意味としては定かではないが、或る力の最初の啓示、或る暗いふしぎな呼び声が私に呼びかけたのであつた。それが汚穢屋の姿に最初に顕現したことは寓喻アレゴリカル的である。何故なら糞尿は大地の象徴であるから。私に呼びかけたものは根の母の悪意ある愛であつたに相違ないから。

私はこの世にひりつくような或る種の欲望があるのを予感した。汚れた若者の姿を見上げながら、『私が彼になりたい』という欲求、『私が彼でありたい』という欲求が私をしめつけた。その欲求には二つの重点があつたことが、あきらかに思い出される。一つの重点は彼の紺の股引であり、一つの重点は彼の職業であつた。紺の股引は彼の下半身を明瞭に輪郭づけていた。それは

しなやかに動き、私に向って歩いてくるように思われた。いわん方ない傾倒が、その股引に対して私に起った。何故だか私にはわからなかった。

彼の職業——。このとき、物心つくと同時に他の子供たちが陸軍大将になりたいと思うのと同じ機構で、「汚穢屋になりたい」という憧れが私に泛うかんだのであった。憧れの原因は紺の股引にあったとも謂われようが、そればかりでは決してなかった。この主題は、それ自身私の中で強められ発展し特異な展開を見せた。

告白
というのは、彼の職業に対して、私は何か鋭い悲哀、身を燃もるような悲哀への憧れのようなものを感じたのである。きわめて感覚的な意味での「悲劇的なもの」を、私は彼の職業から感じた。彼の職業から、或る「身を挺ていしている」と謂った感じ、或る投げやりな感じ、或る危険に對する親近の感じ、虚無と活力とのめざましい混合と謂った感じ、そういうものが溢あふれ出て五歳の私に迫り私をとりこにした。汚穢屋という職業を私は誤解していたのかもしれない。何か別の職業を人から聞いていて、彼の服装でそれと誤認し、彼の職業にむりやりにはめ込んでいたのかもしれない。そうでなければ説明がつかない。

11
なぜならこの情緒と同じ主題が、やがて、花電車の運転手や地下鉄の切符切りの上へ移され、私の知らない・又そこから私が永遠に排除されているように思える「悲劇的な生活」を彼らから強烈に感受させたからだだった。とりわけ、地下鉄の切符切りの場合は、当時地下鉄構内に漂はらっていたゴムのような薄荷はっかのような匂いが、彼の青い制服の胸に並んだ金釦ボタンと相俟あいまって、「悲劇的な

もの」の聯想を容易に促した。そういう匂いの中で生活している人のことを、何故かしら私の心に「悲劇的」に思わせた。私の官能がそれを求めしかも私に拒まれている或る場所で、私に関係なしに行われる生活や事件、その人々、これらが私の「悲劇的なもの」の定義であり、そこから私が永遠に拒まれているという悲哀が、いつも彼ら及び彼らの生活の上に転化され夢みられて、辛うじて私は私自身の悲哀を通して、そこに与^{あずか}らうとしているものらしかった。

とすれば、私の感じだした「悲劇的なもの」とは、私がそこから拒まれているということの逸^い早い予感がもたらした悲哀の、投影にすぎなかったのかもしれない。

もう一つの最初の記憶がある。

六つのときには読み書きができた。その絵本がよめなかったとすると、やはり五つの年の記憶に相違ない。

そのころ数ある絵本のなかのただ一冊、しかも見ひらきになっているただ一枚の絵が、しつこく私の偏愛に戀^{うな}えていた。私はそれを見つめていると永い退屈な午後を忘れていることができ、しかも人がやって来ると何がなしにうしろめたくてあわてて別のページをあけた。看護婦や女中のお守りが私には煩わしくてならなくなった。一日その絵に見入っていられる生活がしたいと思つた。その頁をあけるときは胸がときめき、他の頁を見ても心はそらだった。

その絵というのは白馬にまたがって剣^{つるぎ}をかざしているジャンヌ・ダルクであった。馬は鼻孔を

怒らし、退^{たぐ}ましい前肢で砂塵を蹴立てていた。ジャンヌ・ダルクが身に着けた白銀の鎧^{よろい}には、何か美しい紋章があった。彼は美しい顔を顔当から覗^{のぞ}かせ、凛々^{りんりゃ}しく拔身を青空にふりかざして、「死」へか、ともかく何かしら不吉な力をもった翔^とびゆく対象へ立向っていた。私は彼が次の瞬間に殺されるだろうと信じた。いそいで頁をめくったら、彼の殺されている絵が見られるかもしれぬ。絵本の絵は何かの加減でしらない間に「次の瞬間」へ移っていることがあるかもしれぬ。

……
しかしあるとき看護婦が、何気なしにその絵の頁をひらきながら、横でちらちら盗み見ている私に言った。

「お坊ちゃま、この絵のお話御存知？」

「しらないの」

「この人男みたいでしょう。でも女なんですよ、本当は。女が男のなりをして戦争へ行ってお国のためにつくしたお話ですよ」

「女なの」

私は打ちひしがれた気持ちだった。彼だと信じていたものが彼、女なのであった。この美しい騎士が男でなくて女だとあっては、何になろう。（現在も私には女の男装への根強い・説明しがたい嫌悪^{けんお}がある。）それはとりわけ彼の死に対して私の抱いた甘い幻想への、残酷な復讐、人生で私が出逢った最初の「現実からの復讐」に似ていた。美しい騎士の死の讃美を、後年、私はオスカ

葦と藺のなかに殺され横たわる、

騎士はうつくし。……

それ以来、私はその絵本を見捨てた。手にとることもしなかった。

ユイスマンは小説「彼方」のなかで、「やがて極めて巧緻な残酷さと微妙な罪惡に一転すべき性質のものなりし」ジル・ド・レエの神秘主義的衝動は、シャルル七世の勅によって彼がその護衛の任に当ったジャンヌ・ダルクのさまざまな信じ難い事蹟を目のあたり見ることに、^{かんよう}涵養された、と説いている。逆の機縁、（つまり嫌惡の機縁として、）ではあるが、私の場合も、オルレアンの少女が一役買っているのだった。

——さらに一つの記憶。

汗の匂いである。汗の匂いが私を駆り立て、私の憧れをそそり、私を支配した。……

耳をすましていると、ザックザックという混濁した・ごく微かな・おびやかすような響きがきこえてくる。時として喇叭がまじり、単純な・ふしぎに哀切な歌声が近づく。私は女中の手を引き、はやくはやくと急ぎ立て、女中の腕に抱かれて門のところに立つことへ心をいそがせた。

練兵からかえるさの軍隊が、私の門前をとおるのだった。私はいつも子供好きな兵士から、空になった薬莢やつきょうをいくつかもらうのをたのしみにしていた。祖母が危険だといってそれを貰うことを禁じたので、このたのしみには秘密のよろこびが加わった。鈍重な軍靴のひびきや、汚れた軍服や、肩にかついだ銃器の林は、どの子供をも魅し去るに十分である。しかし私を魅し、かれらから薬莢をもらおうというたのしみのかくれた動機をなしていたのは、ただかれらの汗の匂いであつた。

兵士たちの汗の匂い、あの潮風のような・黄金きんに炒いられた海岸の空気のような匂い、あの匂いが私の鼻孔を搏つかち、私を酔わせた。私の最初の匂いの記憶はこれかもしれない。その匂いは、もちろん直ちに性的な快感に結びつくことはなしに、兵士らの運命・彼らの職業の悲劇性・彼らの死・彼らの見るべき遠い国々、そういうものへの官能的な欲求をそれが私のうちに徐々に、そして根強く目ざめさせた。

……私が人生ではじめて出逢ったのは、これら異形の幻影だった。それは実に巧まれた完全さを以て最初から私の前に立ったのだ。何一つ欠けているものもなしに。何一つ、後年の私が自分の意識や行動の源泉をそこに訪ねて、欠けているものもなしに。

私が幼時から人生に対して抱いていた観念は、アウグスティヌス風な予定説の線を外それることがたえてなかった。いくたびとなく無益な迷いが私を苦しめ、今もなお苦しめつづけているもの